

「神のものは神に」
マタイによる福音書 22：15－22

八月は、広島、長崎への原爆投下、そして終戦の日を迎える、歴史の重みを覚える月です。私たちは平和月間として、戦争によって失われた命を覚え、「平和とは何か」「私たちはどのように平和をつくるのか」と問い続けます。

折しも国会で「国旗損壊罪」が成立し、国旗や愛国心についてさまざまな意見が語られています。国旗を大切にすることは国を大切にする心につながるという考えがある一方、刑罰や圧力によって愛国心を求めることや、異なる意見を持つ人を排除することへの懸念もあります。かつて日本では「国のため」という言葉のもとで、異なる意見を語ることが難しくなりました。だからこそ私たちは、愛することと従わせることは同じなのかと問い直す必要があります。

しかし、キリスト者にとって大切なのは、特定の政治的問題の賛否ではなく、「私たちは何を見上げて生きるのか」という問いです。マタイ 22 章で、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と語られました。

イエスは、社会の中で責任を担うことを否定されたものではありません。しかし同時に、皇帝の権力が人間のすべてを所有するものではないことを示されました。「神のもの」とは何でしょうか。銀貨に皇帝の肖像が刻まれているように、創世記によれば、人間には神のかたちが刻まれています。私たちは神のものなのです。

では、「神のものを神に返す」とは何でしょうか。それは恐れや強制によって神に服従することではありません。神は私たちがまだ罪人であった時から、十字架において先に私たちを愛してくださいました。「私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださいましたからです」（Ⅰヨハネ 4：19）。神に愛された驚きと喜びから、私たちは自らを愛をもって神にお返ししていくのです。

神に愛された者として、私たちはこの国に生きる一人ひとりを愛します。子どもや高齢者、困難を抱える人、そして異なる意見を持つ人々の存在を大切にし、誰もが安心して生きられる社会を願うのです。もしこの国が間違った方向へ進むなら、「それは違うのではないか」と語ること、国を憎むのではなく、人々を愛するがゆえの愛の行為となり得ます。戦時下、日本の教会は、国家への忠誠を優先し、神の御言葉と命の尊厳を守ることができなかった歴史があります。私たちはこの歴史を他人事とせず、「国家に従うことと神に従うことを混同していないか」「周囲の空気に流されて沈黙していないか」と自省し続けなければなりません。

最後に私たちが見上げるのは、権力や世論ではなく、十字架の主イエス・キリストです。暴力に暴力で応えず、十字架上で「父よ、彼らをお赦しください」と祈られた神の国の王を見上げるとき、私たちは恐れではなく愛によって、この国と隣人を愛し、平和と和解を求める者として遣わされていくのです。